ブレッド・マイスター

yomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブレッド・マイスター

【Ｎコード】
Ｎ５８２０Ｖ

【作者名】
ｙｏｍｏ

【あらすじ】
パン職人の主人公が、突然現れた女の子と共にパンを愛する世界へと旅立つ？　しかし、その世界でのパンの存在は、ただ美味しいという記憶だけ。今や過去の物となってしまった。この主人公の活躍により異世界が救われるという物語です。

ー第1話ー　「　ルシア　」

この町に来て１０年の歳月が過ぎようとしている。

町を一望できる小高い丘の上に店を開いてから、もう5年になる。今では評判のいいパン屋で通っている。自分で言うと少し照れくさいが、おかげさまで忙しい日々を送らせてもらっている。

私は、伊沙元　陸（いさもと　りく）３５歳

ちなみに……まだ独身である。

よくパートさんが私を心配してか？　お見合い写真を持ってくるのだが……

今日も、私はパートさんに捉(つか)まっていた。

「だからねぇ～私たちパートのおばちゃんじゃなくてさ～」

「そうそう、本当のパートナーが必要なのよ！　つまりお嫁さんよ～」

いつもながらのストレートな言われようだ……

まぁ、この人達の言い分は確かにごもっともである。

「そういえば……ほら今日来たあの子？　どこの娘(こ)かしらね～？」

「そうね～見かけない娘よね～１７、８ってとこね～でも、もっと若いかしら？」

どうも私が休憩中に来店したお客さんの事らしい。

「ちょっと若いけど、あぁいう娘も良いんじゃない？　かわいくて……フフフッ」
「あら～あの娘は、店長には若過ぎじゃないの～」

この二人がラストの日は、いつも祭り騒ぎのようだ。

「はいはい……今日もお疲れ様でした」
「また明日、よろしくお願いしますね」

どうも……この人たちには太刀打ちできないな。

次の日の閉店後のこと……

「今日は来なかったわね、あの娘」
「でもさ～あの娘……何か違うのよね～」

また、あの来店した女の子（昨日のお客さん）の話しをしているようだ。
さすがベテランのパートさんともなると、お客さんの事を良く見ていらしゃる。

「何か気になる事でも？」

うかつにも、パートさんたちの会話に首を突っ込んでしまった。
しかし、私もどんな娘なのか少し興味を持っていた。

「勘よ！　勘！　女のね！」
「なに？　気になるの？　今度来たら教えてあげるわね」

「それはそうと、この間の……」

……また、お見合い話しが始まるのか？

「はいはい……今日もおご苦労様でした」

「明日は、定休日なのであさって、またよろしくお願いしますね」

このままだと、大変な事になりそうなので、早々に退散して頂いた。

定休日の前の日は、いつもビールを飲みながらベランダにあるベンチチェアに腰掛けて美しい満天の星空を眺めていた。今日は、ぼんやりと昔の事を思い出していた。

先輩厳しかったな～パンの世界に足を踏み入れてからもう１５年以上経つんだな。

先輩どうしてるかな？　まぁ、ほのぼのとした今の環境があるのも厳しかった先輩のおかげなのかもしれないな。

……ん！？

「何だ？」

……何事！？　空に女の子！？　一瞬目を疑った！

「酔ったかな？　きっと疲れてるんだな……」

今は、酔いと疲れのせいにして流そうと思った。でも今日は、ま

だ、そんなに飲んでは
いないはずだが？　疲れてはいるけど……
疲れてるのは、いつもの事である。それは、私の1日の勲章だと思っている。

もう一度、恐る恐る視線を上に向けた……
「やっぱり浮いてるよな～もしかして……幽霊か！？」
見上げた先には、確かに女の子の姿があった。
現実では、ありえない事が目の前で起きているのだ。
「えいっ！」
女の子は、私めがけて指をピン！　と弾いた。
突然、私の体に何か見えない圧力が襲いかかった！
「うわっ～……」
一瞬にして体の自由をうばわれた。まったく動く事ができない！
どのくらいの間だろう……数分間？　いや数秒？　すぐに体の自由は戻った。
私は、くまなく全身をチェックしたが、特に変わったところは何も無かった。
「ふむふむふむ……OK！　合格ね！」
「それと……この間は、おいしいパンをありがとう」

その女の子は照れくさそうに言うと、私の側にふわりと降り立った。

「何が合格？　いったい何の話だ？　……おいしいパンをって、店のお客さんか？」

やはり目の前で起きている出来事が今ひとつ理解できずにいた。普通は、空から女の子が降りて来るなんて話しはありえない事だ。

次の瞬間！　女の子は、私を指差してこう言った。

「簡単に言うとね、ワタシはあなたを勇者に推薦します！」

女の子は、またもや理解不能なことを口にした。
この一言が私を更なる理解不能な世界えといざなった。

「ゆっ……勇者？　はぁ？　何者だ君は？」

私は、動揺を隠せなかった。

「ワタシは、この世界の人間ではありません」

その娘は、自分が他の世界から来た事を私に告げた。

「この世界の人間ではなって？　……へぇ？」

どこから見ても……普通の女の子だけどね。
でも、よ～く考えると何だか色んな事がおかしいぞ！　ドッキリか！？

何とかこの状況に打ち勝とうとする自分がそこにいた。

「……どうしたの？」

女の子は、固まっている私にやさしく声をかけた。
この今の私の心情など、この娘が知るよしも無いだろう。

女の子は、にっこり微笑(ほほえ)んでくるりと一歩さがると……

「ワタシは、ルシアよろしくネ！」

第2話に続く……

ー第2話ー 「アースリア」（前書き）

突然！夜空から舞い降りた謎の少女ルシア、そして勇者に推薦されてしまった主人公。３５歳のパン職人の陸に訪れた異世界への招待嬢？

―第2話― 「アースリア」

突然の夜空からの訪問者に驚いた私だが……

「あぁ……こちらこそ！　よろしく……ん？」

ついつい反応してしまった自分に、今は何も言えなかった。
ただ、赤面していない事を祈った。

「は～い……了解したよ～」

ルシアは、だれかと交信中？　……なのか？
でも、携帯も無しにどうやって？　やはり普通ではない。

「あのさ～もう冗談はよそうよ！　カメラがどこかにあるんだよね？」

この現実離れしたバカバカしい状況が、ドッキリだと信じたかった。
これが、ドッキリだとするなら……つじつまが合うと、私はそう考えたのだ。

「何言ってるの？　君は選ばれたのよ！」
「じゃ～早速、出発しよっか！」

私の今の話しを聞いていなかったのかな？

「ちょ……ちょっと待ってくれ！？」

この世界に留まろうという私の本能が口を開かせた。
「だいたい勇者が、こんな……おじさんでいいのか？」
私は、何て質問をしているのだろうか。
決して、往生際が悪い訳ではないが……悪いのか？
最後の抵抗とでも言うか……この取り止めの無い質問を続けた。
「普通、勇者ってのは、もっと若いだろう～１０代か？」
「まぁ～５００歩位譲って……２０歳（ハタチ）前後位か？　でも、やっぱり１０代前半か？」
何言ってるんだ私は……
完全に頭の中がパニック状態になってしまった。これから、どうなる？　どうなってしまう？
……全身に今まで感じたことの無い感覚がはしった。
「心配ないよ～」
ルシアは、そんな私の両手をそっと握りしめ、やさしくにっこり微笑んだ。
すると何やら周囲が輝き始め、これはまさしく……この展開は！
「おっ……おい！？　ファンタジーなアニメじゃないんだぞ～！！！！！」
私は声の限り叫んだ！　叫ばずにはいられなかった。
しかし、どう叫んでも今の状況を変える事は出来なかった。

眩(まばゆ)い光はどんどん広がって行き私の意思とは無関係に2人を包み込んでいった。

……しばらくすると、その光から開放された。

しかし、光の眩(まぶ)しさで、まだ目が慣れていない。
でも何だかすぐそばに……たくさんの人の気配を感じる。

ピカッッッ！！

「うわっ……まぶしっ！？」

辺り一面がまるで昼のように明るくなった！　そして、大勢の人がこちらを見ていた。
よく見ると、今いる自分の場所は、大きな屋敷の庭園だった。

歓声の渦と共に楽しげな演奏が始まった。

「お待ちしておりました。勇者殿」

マントをはおり、剣(けん)を腰に差した男が私に話しかけて来た。
服装は、私のいた世界とは大きく違っていた。

「勇者殿って？　やっぱりここは……異世界？」

次の言葉でそれは、決定的なものとなった。
ドッキリのテレビ番組の世界ではないという事が……

「ここは、アースリアのセンターシティ・リド」
「私は、この街を守る第一防衛隊長のラークスと申します」
隊長？　自分より少し若い位なのに隊長とは恐れ入る。
「突然の出来事で驚いたことでしょう。でも現実なのです」
「あなたは、この世界を救う為に選ばれた3番目の勇者です！」
「3番目？」
1番目じゃないのか……そうすると、自分の他にも2人いるという事になるな。
その人達と、協力するという事なのか？　でも、勇者が3人もって……何か変な話しだな。
でも、ここは、アースリアという異世界であることは……確かである。
何か、さっきのルシアって娘(こ)に思いっきり不甲斐(ふがい)ない姿を見せてしまったな。
そのルシアは、美味しそうに御ちそうを食べていた。
「え～よろしいかな？」
「正確に言えば、まだ勇者候補とでも言いましょうか……」
補足するかのようにラークスは、候補という言葉を付け足した。
考えてみれば、まだ何もしていないから当然といえば当然のことである。
「他の2人は、今どこに？」

私は、開き直ったかのように当り前のような質問をしてみた。
すると、ラークスの口からしぶしぶ回答が返ってきた。
「……その人達は、もうこの世界には居ないんです」
もう居ないから……だから3番目という事なのか？
「あなたが、この世界から戻る方法は幾つかあります。が、でも今は伏せておきましょう」
……って、おい！　そこは最も重要なところだろう。
「その格好では、何かと不便でしょう。何か用意させますのでこちらへ」
ラークスは、私の身なりが気になる様子……よく見るとパジャマのままだった！！
私は、この時……本当にドッキリだと思いたかった。
「皆さんは、このまま宴を続けて下さい」
ラークスは、会場の人達に一言いうと、私を連れ屋敷の中へ入って行った。
「一つ質問いいかな？　……その勇者には、年齢って関係ないのかな？」
やはり……どうしても気になってしまうのである。
「えっ？　ルシアから何も聞いてはいませんか？」

「ご自分の姿を見てください」

ラークスは、私を大きな鏡のある部屋に案内した。
その鏡に映った自分の姿を見て、私は固まってしまった。

「こっ……これは！？　一体？」

そこに映っていたのは、おそらく１５、６年前であろうという自分の姿だった！
これは、５００歩譲ったって訳だね。

「ルシアは、本当に何も説明してなかったのですね」

ラークスは眉間に手をあて、今の状態を説明し始めた。
そう言えば……ルシアが「心配ないよ～」って言ってたな～こういう事なのか？

「その姿は、あなたが今まで生きてきた中で１番……」
「そうですね～誰にも負けたくないという気持ちが強い時の姿です！」

「今でも誰にも負けたくない気持ちは、少しも変わっていないけども！」

私は、すかさず反応した。
でも、よく考えるとこの姿は……死ぬ気でがんばって苦労していた時期の姿である。

「まぁまぁ、今は宴を楽しんで下さい」

ラークスは私の肩を軽くたたいた。

そして、再び私たちは会場に戻って来た。

楽しい宴も終わり、私は静かに眠りについた。

第3話に続く……

―第3話―　「　センターシティ・リド　」（前書き）

勇者に推薦された事実、ここが異世界アースリアだという事実を受け入れる現実！？

ー第3話ー 「 センターシティ・リド 」

小鳥のさえずりと共に朝がやって来た。

やはり目が覚めても見慣れた家の天井ではなかった。
これからどうなるのだろうか？浦島太郎にはなりたくないよな……

そう思いながら部屋にあった鏡の前に立って見た。

「しかし、本当に昔の姿だよな～」

自分の姿を不思議そうに何度も見つめ返した。
そして、太陽の光が降りそそぐ窓辺から外を眺めて見た。
そこには、広大なセンターシティ・リドの街並みが広がっていた。

「おっはよ～リク！」

太陽より明るい元気なルシアの声が飛び込んできた！

「おはよっ！」

とりあえず、こちらも元気よく返した。
この世界の服装に着替えて、再び鏡に自分の姿を映した。

「勇者か……それでオレは、何をすればいいんだい？」

勇者というからには、何か行動しなくては……と思った。
……今？ 「オレ」って言ったよな……まぁ、いいか。

「今日は、とりあえず街を見てまわろうよ！　い～ぱい案内するから～ゆ・う・しゃ・ど・の～」

「朝から、からかってるのか？」

まぁ、楽しげなルシアに免(めん)じて……天気もいいしね。

ルシアは、微笑みながら私の手を取って、この広い屋敷から連れ出した。

「ん～いい天気！　このリドの街はね別名『ブレッドシティ』って呼ばれてたんだよ～」

「……ブレッドシティ？　何かおいしそうな名前だね」

まずは定番？　とでも言うか、噴水のある大きな広場からスタートした。街を歩いていると、何か懐かしい感じがした。　それは、昔やったゲームにある『武器やアイテムを売る店』があるからだろうか？　でも、この世界は現実に存在している。私は、改めてそう思った。

「あれ～？　どうしたの～楽しくないかな～？」

ルシアが私の顔を覗き込んだ。

「楽しいよ……あのさ、この世界って魔法とかあるの？」

異世界だし……思い切って聞いてみた。どんな答えが返ってくるのか少し興味があった。

「ん？　魔法ならあるよ」

何か、あっさりと答えが返ってきた。

「でもね、許可がないとダメなんだよね～」

許可？　許可なんかいるんだ……実際に見てみたいものである。ここ（アースリア）に来る時のあの光……あれは？　魔法じゃないのか……

ルシアの案内で、リドの街を1日近くをかけて噴水の広場に戻って来た。

「ふぅ～疲れたね……街外れまで行くには、あと2、3日はかかるかな～」

「2、3日……何て広い街なんだ」

リドの街を歩いていて疑問に思ったことがあった。

それは、ケーキなどスイーツを売る店はあった。でもパンを売る店が一軒も見当たらなかった。

「ねぇルシア、この街のどこがブレッドシティなんだい？」

当然といえば、当然の質問をしてみた。

「1年前までは、たくさんのパン屋さんがあったんだよ……」

今まで明るいルシアの顔がくもった。この世界に一体何があったというんだ？

「……でも、リクが今、ここにいるから大丈夫！　ワタシ信じてるからね」

「おいしいパンをみんなで、食べる日が来る事を……」

やはりパン屋が世界を救う！？　アースリアを救う？　……そういう事なのか？

「どうやって世界を救うんだ？」

ここに来てからというもの……？？？　な事が多すぎる。

この時、一刻も早くこの状況を理解しなければと思った。

「今日は、街を案内してルシア疲れちゃった～」

「明日にしよっ！　決まり！　じゃ～ね～」

ルシアは私を置いて行ってしまった。

そして一人私は……噴水の広場で呆然（ぼうぜん）と立ち尽くしていた。

我に返り……

「世界を救うのは、そんなのん気でいいのかぁぁぁぁぁ～！」

私は、噴水の広場で声を大にして叫んだ。

部屋に戻った私は、少し頭を整理してみる事にした。
パン屋が無いのにブレッドシティ？　その理由は1年前の出来事にある。

この世界を救うパン職人……か。

まぁ、街の人に聞いてもいいのだが、ゲームじゃないんだし明日を待つとするか。

美味しかった夕食を腹いっぱい食べたせいか眠くなってきた。

ラークスは、居なかったようだが……

だめだ……ねむい

第4話に続く……

―第４話―　「ドーキン」（前書き）

パン屋が無いブレッドシティ・・・リド。その原因が明らかにアースリアの危機に直面する陸！

―第4話― 「ドーキン」

「おはよっ～！」

「……どうしたの？　なんか～まじめな顔しちゃって～」

昨日と同じ明るい笑顔のルシアが、ベッドで横になっていた私の視界に飛び込んできた。

「おはよう……朝から元気だね」

考え事をしていたせいか、浮かない口調で対応してしまった。

「ワタシは、いつだって元気だよ！」

まぁ、元気の無いルシアは、あまり想像したくないな。……と思った。

「ところで、このアースリアに国王とか国を治める人っていないの？」

この世界に来てから数日経過しているが、お会いできるという感じ？　気配がまったく感じられない……そこでルシアに聞いてみた。

「勇者に推薦された以上はさ～、この世界を救う為に行動するのだから、どう考えても一番最初に会っておかなければいけない人物だと思うんだけど？」

少し強い口調になってしまった。

「ん～それには色々と事情があって、今すぐお会いするのは無理なんだよね……ごめんね」

なんか、ルシアを困らせてしまったかな？　でも、そんな偉い人に簡単に会えるものでもないか……

「いや、ルシアが謝る事は無いし……こっちこそ気を悪くさせてしまったかな？」

さっきも思ったが、やはり元気の無いルシアは見たくない。
何か変に重苦(おもくる)しい空気が部屋の中を漂っている。

「今日は、ここ（アースリア）にパン屋さんが無い理由(わけ)を話そうと思って来たの……」

ルシアは、何とかこの雰囲気の中、口を開てくれた。そして、今からある場所に案内してくれるという話しだ。

今日も、雲ひとつ無い気持ちのいい青空が広がっていた。
私は、歩きながらルシアの方を横目でチラッと見た。会話の無いまま、昨日とは反対方向に歩いて行く。

着いた場所には、とても大きな樹があった。たくましい姿で迎えてくれている様だ。
その横には、何か建物があったのを思わせる形跡があった。

「ここはねっ……」

ルシアが話そうとした時……ラークスが樹の陰から現れた。

「ここからは、私が話そう……ありがとうルシア」

ラークスは、ルシアの代わりに話し始めた。
ルシアは、話しの妨げにならぬよう一歩下がって身を引いた。

「1年前は、このアースリアにベーカリーが612軒ありました」
「このリドの街には、359軒ものベーカリーが存在していました」

世界の半分以上のパン屋がこの街にあったとは驚きである。
パン好きな人達が住む世界？　アースリア……か。

「この場所には、アースリアで一番のマイスター、ライスタのベーカリーがありました。」
「でも今は、このように何もありません」

一体何があったのだろう？　それにマイスターとは……

「着いて来て下さい。お話しは、そこで致します」

ラークスは、口をつぐみ歩き出した。
しばらく歩いて、着いた先は『MEISTER・MUSEUM（マイスター・ミュージアム）』と書かれた巨大な建物の前だった。昨日は、この前を通るだけだった。改めて見ると大きいな。

「ここは、あらゆる職業のマイスターに関する情報を管理している場所です」
「さぁ、中に入りましょう」

重厚なミュージアムの外観を眺めながらエントランスへ入って行く。
私は、緊張しながらも好奇心でいっぱいだった。中に入ると、そこには魔法で管理された空間が広がっていた！

ミュージアムの外観もすごいが、中に入ると、また圧倒されてしまう程の造りになっていた。

「リク～こっちだよ～！」

ルシアが遠くの方で手を振っていた。何か元気になったみたいだな……よかった。
ルシアのいる場所に行ってみると『Ｂ－ＭＥＩＳＴＥＲ』という表記があった。

「Ｂ－ＭＥＩＳＴＥＲとは、ブレッド・マイスターという意味です」

ラークスと私は、歴代のＢ－ＭＥＩＳＴＥＲの映像の前で足を止めた。

「このＢ－ＭＥＩＳＴＥＲは、アースリアに７人いました」
「７人しかなる事が出来ないのです」

さっき聞いたベーカリーの数からして、相当な狭き門という事なのだろう。
でも、たったの７人とは、ライスタという人は、その中のトップという事か……

「この称号を受けた者は、アースリアにおいても上位的な存在となります」

私は、パン屋の……いや、ブレッド・マイスターの存在価値に驚きを隠せなかった。

「どの職業のマイスターもそうですが、ベーカーリー界のマイスターは別格なのです」

「何よりも国王が、このアースリアで一番パンを愛しています」

国王が、アースリアで一番パンを愛している。だからＢ－ＭＥＩＳＴＥＲは、別格という事なのか。

「１年前のこと、ドーキンという男が愚かな事をしてしまったのです」

「ドーキンは、Ｂ－ＭＥＩＳＴＥＲの称号が欲しいが為に……」

「絶対に使ってはならない禁呪を発動させてしまったのです！」

禁呪？　俗に言う禁断の魔法といったところか？

「その禁呪とは……」

「自分以外の人々から、製パンレシピの記憶を消し去って、ただパンは美味しい物だという記憶だけを残すという……そんな恐ろしい呪いだったのです」

何と言うメチャクチャな呪い？　……魔法だ。どんな願いでも叶う魔法なのか？

「記憶を失くした人々は、何をしたらいいのか分からず、正気を失う者まで現れました」

「特にひどかったのは、マイスターの7人で相当な精神的ダメージを受けました」

「幾らなんでも、そんな事って……正気を失う？」

少し大げさじゃないかと、この時は思った。パンを作れなくなったマイスターは、
ただの人って事になるのかな？

「……それだけ、パンの事を大切にしていたという事ですよ！！」

ラークスの機嫌を悪くさせてしまった様だ……それに、ルシアの顔が悲しげに見えた。

私は、すぐに謝罪の言葉をさがした。

「自分もパンを作る者として、軽率な発言……申し訳ない」

確かに自分も今までパン一筋だから、作れなくなったら……どうなるだろう？
考えただけで、底知れぬ恐怖すら感じた。

再びラークスは、続きを話し始めた。

「ドーキンは、Ｂ－ＭＥＩＳＴＥＲと勝手に称しプンパ山（さん）のふもとにベーカリーを開きました」

「でも彼のやった悪行は、この世界の者なら誰もが知っています」

「どんなにパンが欲しくて食べたくても、誰一人として……」

ラークスは、言葉を詰まらせた。

「失礼……誰一人として、ドーキンのベーカリーにパンを買いに行く者はいませんでした」

アースリアの人々のパンに対する姿勢が半端な物ではない事が分かった。

「私たちも、国王にその様な事情のパンを食させる訳にはいきません」

本当に徹底している。この世界の人々に尊敬すら覚えるくらいだ。

「ドーキンは、パンを作っても誰にも食べてもらえない辛さ？　からなのか……

ある行動に出たのです」

「その行動とは、ドーキンを屈服させる事ができたら、すべてを元に戻す……と」

また、禁呪を使うと言うのか？　そんなに何回も使える便利な物なのか？

でも、よく考えたら自業自得なんじゃないかって思う。

「製パンレシピの記憶を消した張本人が、何を言ってるかな？」

本当によっぽど辛かったのか？　そこは、本人に聞かないと分からないが……

「そうなのです。製パンレシピを失った今の私たちには、対抗できる者がいませんでした」
「ただ、記憶を失った時に道具やオーブンの使い方も一緒に忘れてしまったのです」

そんな事って？　道具の使い方まで……

「ベーカリーにあったオーブンは、その物まで無くなりました」

Ｂ－ＭＥＩＳＴＥＲへの憧れもここまで来ると……ただの悲しい悪者だな。

「やさしくて、ふくよかな国王は、好物のパンを食べれないストレスから食欲を失いました」
「そして、見る見るうちに痩せていきました」

何だかラークスの表情がよろしくない。……大丈夫か？

「やさしかった国王は、特に最近……機嫌が悪くイライラしている状態が続いています」
「このままだと、御身体にも良くない」

アースリアの国王は、それほどまでにパンを愛しているとは……

「今は、このリドの末端の人々の事さえも気に掛けない始末です」
「アースリア全体の危機を感じた私たちは、他の世界から協力を求める事にしました」
「その為の使者というのが、ルシアなのです」

「協力？」

……半ば強引？　だった気が……ルシアと目が合った。

ルシアも私の方を一瞬見たが、少し苦笑いをして視線を外した。

「ワッ……ワタシちょっと向こうに行って来るね……アハハ」

「……」

「……？」

ラークスは不思議そうな顔をしていたが、話しを再び始めた。

「やっとの思いで2人の方を……そして陸殿、あなたを見つけたのです」

本当に、この異世界アースリアを救うという事なんだな。

勇者として……救うという事の重みを実感した。

なんと言っても国王を救わなければならない！

第5話に続く……

―第5話―　「マイスター」（前書き）

陸は、ドーキンの行った行為をようやく把握することが出来た。
……そして、自分に与えられた使命に闘志を燃やしていた。……そこにマイスターが現れる。

ー第5話ー 「 マイスター 」

ラークスの話しによって、アースリアの現状が見えてきた。

私たちから……私から？　少し距離をおいていたルシアが戻ってきた。

「ルシア～お腹が空いたよ～」

正直……自分の腹の虫も鳴きそうであった。ラークスは、おもむろに左の内ポケットから懐中時計を取り出し時刻を確認した。

「もう、ランチの時間か？　お店の予約は大丈夫か？　ルシア」

「大丈夫だよ！　お兄ちゃん！」

「おにい……ちゃん！？」

私は、ハトが豆鉄砲でもくらったかの様な顔で2人を見た。

「あれ？　申していませんでしたか？　兄妹だという事を……」

「ないない！　初耳だけど」

私は、大きく右の手をふって驚きを隠せない事をアピールした。

そうこうしている内に予約の店に着いた。

そこは、ツタが良い感じに巻きついた煙突と、テラスのあるおしゃれな店であった。そして、私たちは奥の部屋へと案内された。部屋の窓から入ってくる風を心地よく感じた。とてもアースリアの危機とは思えないほどに……

ゴ～ン！ゴ～ン！……

正午を告げる鐘の音が響き渡った。

少しの間、先ほどの話しを頭の片隅に置いて、目の前に運ばれてきたランチを楽しむ事にした。

「兄妹って言ってたけど、ラークスは何歳なの？　隊長もやってるしさ」

３２歳か？　３３歳ってところか？　予想を立ててみた。

「私か？　私は２７ですが……？　どうかしましたか？」

３０前か……思ったよりも若かった。エリートなんだろうか？
ただの金持ちか？
となると、ラークスが２７歳なら……ルシアとかなり年齢が離れているような気がする。

「へぇ～そうなんだ」

「ルシアは、なん……まぁ～いいか、女の子に年齢を聞くのは……」

私は、ルシアの方を横目で一瞬見た。

「えぇ～ルシアには聞いてくれないんだ～！」

飲もうとしていたコーヒーを危うくこぼすところだった。聞いて欲しいのか？　聞いて欲しいんだ～気を取り直して、聞いてみる事にした。まぁ～15、6ってところか……でも、そんなに瞳(め)うるうるさせなくても……

「じゃ……じゃ～ルシアは何歳なの？」

若いから特に気にする事でもないのか？

「ワタシは、19歳だよ～明日、誕生日なんだ～20歳になるんだよ～」

「19歳……明日で20歳！？　……おっ、おめでとう」

確信していた私の予想がどこか遠くに飛んで行ってしまった！

「あとね～お姉ちゃんもいるんだよ」

「アリスお姉ちゃんは、23歳なんだよ～今、ものすごく忙しいの」

「そういえばルシアは、あの屋敷に居ないみたいだけど？」

人それぞれ事情があるんだろうけど聞いてみた。

「今は～リサおば様の所で、立派なレディになる為の修業をしているの」

「ぷっ……」

思わず吹いてしまった！

「あ～ひど～い！！」

「まぁ、もうちょっと御しとやかにならないと……貰(もら)い手がないぞ～」

ラークスもなかなか言う、さすが兄妹だな。

「もう～お兄ちゃんまで～！！」

少し機嫌を損ねたルシア……なんか可愛いかも？

「ルシアも頑張ってるんだね」

私は、すかさずフォローの言葉を入れた。

「立派なレディになってみせるんだから！」

「ルシア、他に何か食べたい物はあるか？」

結構、食べたと思うが……ラークスはルシアにメニューを渡した。

「じゅあね～この……」

まだ食べるのか？　さすが女の子だな。入るところが違うのか？
べつ腹ってやつかな。

「陸殿は？」

私は、手でもう結構という合図を出した。

楽しい会話を交えながら、ゆっくりとした時間が流れていった。

しばらくして店を出た私たちは、場所を屋敷に移してドーキンの件を再開することにした。ラークスは、テーブルの上にアースリアの地図を広げた。そして、ドーキンのベーカリーがあるプンパ山の場所を指差した。

「ここがプンパ山で、ここが今いるセンターシティ・リド」

結構？いや……かなり遠い所にある山だという事が分かった。

その時！　一人の兵士が駆け込んできた！

「失礼します！　隊長！　報告します！」

その兵士のあまりの慌て様にラークスの顔つきが変わった。

「ブレッド・マイスターのライスタ様、レネーラ様、ダリオス様の3名が……3名が！！」

「まず落ち着くんだ、3名がどうしたと言うのだ？」

ラークスは、冷静になる様に兵士に命じた。

兵士は、一呼吸おいて再び報告を始めた。

「失礼しました！　報告します！」

「ブレッド・マイスターの3名が街に現れパンを配っています！」

ラークスは、言葉を失うほど驚いていた。

私も意味が分からなかった。なにしろ、このドーキンの件に関しては把握したばかりだしな。

「パンを配っている？」

ラークスは、兵士に問いかけた。

「はい！　確かに配っていたのは焼きたてのパンでした」

「よし陸殿！　すぐ確認しに行来ましょう！」

まず、この混乱した頭を納得させる為に状況を確認する事にした。

そんな中で私は、ふとある事に気付いた。パンが作れるのなら……自分は要らない？

そして、またある事にも気が付いた……

この展開は、元の世界に戻されて再びこの世界に戻って来るというシナリオか？　そういう展開なら戻らないでおこう……そう思った。

「あっ！！」

戻ると言うキーワードから、自分の世界のこと……店の事を思い出した。こっちに来て数日……向こうはどうなっているだろうか？

取り留めの無い不安が私を襲っていた。

「陸殿……どうした？」

突然の声にラークスが私に声を掛けた。

「……」

ラークスの声は、私には今届いていなかった。

「陸殿！　……陸殿？」

再びラークスが声を掛ける。

「あ・・・あぁ～大丈夫」

我に返った私は、ラークスと共に急いで屋敷の外に飛び出した！

「こっ……これは？」

街の人々がパンを手にし美味しそうに口に運んでいた。

「本当にパンをくれたのは、ブレッド・マイスターでしたか？」

ラークスは、側にいた人に事情を聞いた。

「はい、確かにライスタさんでしたよ～」

満面の笑みで答えが返ってきた。ラークスは、3人が今どこに行ったのかを尋ねた。

「3人なら、王宮の方に向かって行きましたよ」

私たちも王宮に向かう事にした。整えられた王宮への道……しばらく行くと存在感のある建造物が現れた！ラークスのおかげで私も中に入ることが出来た。

先ほど見たミュージアムも凄いと感じたが……比ではない。

「お待ち下さい！！」

「只今、大切なお客様が来客中の為、どなたも通すなとの指示を受けております」

2人兵士が行く手を塞いだ！

「いくらラークス様でも、ここを通す訳には参りません！」

「ラークス様！！」

ラークスは、兵士を振り払いドアを勢いよく開けた！

「失礼します！　国王陛下……」

中にはマイスターの3人の姿があった。国王は、3人が献上したパンを美味しそうに召し上がっていた。

「おぉ～ラークスか、やはりパンは美味い最高だよ！　お前もどうだ？」

国王は、上機嫌である。

「これは、一体どういう事なのか説明して頂きたい！」

マイスターに問うラークスの手に力が入る。

「まぁ～良いではないか」

国王は、にこやかな笑顔でラークスをなだめた。

そして、マイスターの1人が口を開いた。

「何も不思議な事はありませんよ。ただ記憶が戻っただけです」

「これからは、陛下の為にどんどんパンを焼きますよ！」

国王は、ますます上機嫌といった様子でパンを口に運んでいる。

「ところで……そこの男は何者だ？」

国王は、私の事に気がついた様子。

「この方は、異世界から来て頂いたブレッド・マイスターです！」

胸を張り、私を紹介したラークスだったが……次の国王の言葉が打ちのめした。

「あぁ～もう必要ないぞ、自分の世界に戻って頂きなさい……モグモグ」

「これ！　これ！　この味！たまらないの～」

「……まだ居ったのか？もう下がってよいぞ」

国王は、止まる事を知らないロボットの様にパンを食べ続けていた。

「しかし陛下！　これは……」

ラークスが、最後の言葉を発する前に数名の兵士によって、私たちは王の間から退出する事となった。

しかたなく屋敷に戻った私たちをルシアが待っていた。

「どうしたの？　怖い顔して？」

ルシアは、心配そうにラークスに話しかけた。

「……うるさい！」

ラークスは、ルシアを振り払った。

「大丈夫かい？ルシア」

私は、よろめくルシアを受け止めた。

「本当にすまない陛殿、何と詫びていいのやら……」

ラークスは、振り返り本当にすまない顔で私につぶやいた。

ルシアに王宮での事を話した。

「えぇ～！？　そんな～帰っちゃうの？」

「いや！　まだ帰らないつもりだ！　もう少しアースリアに居ようと思う」

自分の世界も気になるが、何か納得がいかない。

私は、やさしくルシアの頭をなでた。

「国王陛下のご命令は絶対ですよ！」

振り向くとマイスターの3人が立っていた。いつに間に追いつかれたのか分からないが、確かに王宮に居た3人がそこに立っていた。

そして、その中の女性が話しかけてきた。

「この人……結構、私のタイプなんだな～このまま居れば？　私は、レネーラ」

「何をバカな事を言ってるんだ！　ライスタの言う通り陛下のご命令は絶対だ！」

もう一人の男……ダリオスが、レネーラの言葉を跳ねのけるかのように言った。

「冗談よ、冗談～帰る前に、どうぞ～食べてね」

レネーラは、私にパンの入った袋を差し出した。私たちのパンをご賞味あれとでもいうかの様に……

私は袋からパンを取り出し口にした。シンプルなバターロールのようだが……

「確かに美味しい……ん？」

でも何か……？　何だろう？

私の中で、素直に受け入れられない何かがあった。

第６話に続く……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5820v/

ブレッド・マイスター

2011年12月17日11時04分発行